



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「観光」という名の幻想
Author(s)	山村, 高淑
Citation	月刊みんぱく, 31(3): 2-3
Issue Date	2007-03-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/34652
Right	国立民族学博物館の許可を得て転載
Type	article
Additional Information	



Instructions for use

「観光」という名の幻想

山村 高淑

(やまむら たかよし)

京都嵯峨芸術大学助教授

マンガの国、日本へ

昨年の六月末、一六歳のフランス人少女二人がパリから列車の旅を続け、ポランドからベラルーシに出国しようとしたところを、ビザ所持の理由で国境警察に拘束された。仏紙リベラシオンが伝えた小さな記事である。良くあるニュースと思いきや、旅の動機を知って驚愕した。じつは、彼女たち、陸路日本を目指していたのである！日本の漫画やビジ

ユアル系バンドの大ファンで、その発信元の日本に行こうと思いついたという。朝鮮半島までの陸路は鉄道を乗り継ぎ、海は船で渡ろうと計画していたそうだ。

一方、昨年のゴールデンウィークに中国は杭州で開催された「中国国際動漫節(アニメ・漫画祭)」は、六日間の会期中に約二八万人の来場者を数えた。なんとこの数は同年の「東京国際アニメフェア2006」(会期四日間)の約三倍である。さらにこの「動漫節」ではコ

スプレ(コスチュームプレイ)イベントがおこなわれ、全中国から多くの若者が集まり大盛況を博した。中国の若者たちが、日本のマンガ・アニメの登場人物になりきっているのである！

さて、人はなぜ、旅に出るのだろうか？フランス人少女に、あえてユーラシア大陸横断の旅を決心させたものは何なのか。あの広大な中国で、若者を杭州に集わせたいものは何なのか。

それは「漫画」であり「J・P・O」であ

り「コスプレ」なのである。一体全体、我々はこの旅をどう理解すれば良いのだろうか？

「幻想」という物語

通常我々は観光という行為を、「本物」を見たり、「現実」を体験したりすることであると考える。しかし、じつはそうではなく、観光とは「幻想」に浸りに行くことなのである、ということをごのふたつの出来事は教えてくれる。我々はローマのコロッセオの前で、案外、建築としてのコロッセオを真剣に見ているわけではない。オードリー・ヘップバーンやグレゴリー・ペックに自らを重ね合わせたりしているのである。

この世界は、いかなれば元素が配列されただけの物質世界であり、それ自体に意味は無い。我々がそこに物語をもたせるからこそ、世界が意味をなすのであり、我々の存在も位置付けられる。我々は旅をとおして「幻想」という物語に浸り、無意味な世界に意味をもたせる作業をおこなっているのである。

これは、実体の無い「神」というものを感じに行く「巡礼」と本質的に同じ行為である。一部のアニメファンが秋葉原に行くことを「アキバ詣」とか「聖地巡礼」とよぶのも、そうした旅の本質に無意識のうち

我々はあらたな観光時代に突入した。インターネットなどメディアの発達により、人類がアクセスできる情報量は爆発的に増大し、観光において消費されるべき幻想はますます肥大化する。この傾向は、今後、観光資源の考え方や観光産

業の形態を大きく変えていくことだろう。上述したような若者の旅の例はそのごく一例に過ぎない。しかし、どんなに資源の考え方や産業の形態が変わろうとも、世界に意味をもたせ、自己を認識するという、精神的欲

求としての旅の本質は、我々が人類である以上、これからも不変である。なぜなら、それは人類が自己という意識をもったときに同時に背負った業だからである。

香港映画「恋する惑星」のロケ地。
日本人にも人気の観光スポット



「アキバ詣」の女子大生。
メイド服でのプリクラ撮影が
旅の目的という



ローマのコロッセオ。
半世紀を越えて
なお根強い人気の映画
「ローマの休日」のロケ地